

東北大学セミナー 「獣医系大学再編の動向と課題」を終えて  
- 開催の経緯、講演と質疑の内容および感想 -

講演者：唐木英明 東京大学教授（全国獣医学関係大学代表者協議会会長）

佐藤英明（東北大学大学院農学研究科教授）

平成11年10月20日（水）午前10時30分から東北大学大学院農学研究科中会議室で唐木英明先生の講演、「獣医系大学再編の動向と課題」を「第28回動物生殖科学教室特別セミナー」として開催しましたが、動物生殖科学教室からの3名の教官に加えて、農学研究科応用動物学系の教授7名、医学系研究科および加齢医学研究所の教授各1名を含め、約30名のスタッフの出席がありました。唐木先生の講演は、最近の国立大学の独立行政法人化の動向なども含め、きわめてインパクトのあるものでした。唐木先生の都合で11時45分で議論を打ち切りましたが、講演の後の質疑も多岐にわたり、かつ白熱したものでした。開催の経緯、講演と質疑の内容を紹介するとともに、セミナーを終えての感想についても述べたく思います。

## 開催の経緯

東北大学には残念ながら獣医学科はありません。しかしながら、唐木先生が会長をつとめる全国獣医学関係大学代表者協議会が「東京大学、北海道大学を除く8国立大学の獣医学科を廃止し、東北大学、九州大学に統合する」よう文部省に働きかけることが報じられて（朝日新聞、平成10年10月14日朝刊）以来、東北大学では獣医系大学再編の動向に大きな関心がもたれてきました。ことに東北大学農学部応用動物科学系（旧畜産学科）では、過去に獣医学科構想をもっていったこと、農学部附属川渡農場が、かつての陸軍軍馬補充部に由来し、獣医学とも強いつながりをもって創立されたことなどから特に関心がもたれてきました。

しかしながら本年開催された全国国立大学農学部長会議で、ある大学の学部長が「獣医学科の東北大学、九州大学への統合案は消滅した」と発言したようで、その話が学部長から教授会の席で伝えられました。失笑に近い大きな笑い声とともに、なんの質問もなく次の議題に移りました。その後、獣医学の動向に対する関心も急速に薄れてきてきました。獣医学科の先生方の動きに注目していた者にとって、このようなかたちで東4大学（帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学、岐阜大学）の統合案の消滅を聞くことになったのはたいへん残念でした。

先日（平成11年10月4日）、東京大学農学部で日本学術会議畜産学、獣医学研究連絡委員会（畜産研連、獣医研連）の合同会議があり、「畜産学教育研究と獣

医学教育研究の現状について」論議されました。獣医研連を代表して唐木先生が、「獣医学研究に関する現状」と題する基調報告を行いました。その中でも「東北大学への統合案の実現は難しい」との認識が示されました。難しいとの認識は獣医系大学側の問題だけでなく、受け入れ側（東北大学）の問題もあるとの認識が示されました。しかしながら、私としては、このような「難しい」という判断がどのような経緯で出てきたのか推測できない点もありましたし、また、東北大学関係者との具体的論議を経ずに、一方的に下された判断のようにも思えました。

そのようなこともあり、唐木先生から直接、「東北大学、九州大学への統合案」が誕生した経緯、「東北大学への統合案が難しい」と判断された経緯などをお聞きしたいと考えました。東北大学医学部に講義に来られるとお聞きしましたので東北大学農学部で「獣医系大学再編の動向と課題」と題する講演をお願いしました。快くお引き受けいただき開催の運びとなりました。

## 講演の内容

内容は佐藤のメモをもとにまとめたものです。唐木先生の講演内容を正確にまとめたつもりですが、唐木先生の点検は受けておりません。

まず、全国の獣医学科（学部）をもつ大学、学生数についての説明があり、優秀な学生が入学するものの、卒業生に対して、臨床教育が不十分、公衆衛生の教育が不十分、基礎教育部分のレベルの低下など、批判されることが多くなってきたことが話された。とくに獣医学の学部教育が6年になって以降その批判は強まっている、このように批判されるようになった原因は、獣医学教育関係者の努力不足にもあるかもしれないが、システムの欠陥もある、特に教員数や教育用の機器、施設、設備が不足していることに原因し、医学や歯学、あるいは欧米の獣医学教育と比べて大きく見劣りすることなどが紹介された。

農産物の輸入拡大などに伴い、将来、獣医学は国際的な評価をうける機会が増えると予想される。今のままの教育が続けば、特に病気の防疫体制においてわが国の獣医師は厳しい評価を受けることになるだろうし、わが国の獣医師が国際的に評価されなければ、欧米の獣医師の日本参入も現実のものとなるだろう。これに関連してEU統合後、EU内の獣医系大学の評価（教育施設、設備、教員数、カリキュラム）がなされたことや、実際に評価基準を満たさないと不合格とされた大学もあったこと、不合格の原因は主に教員数の不足によるものであることなども紹介された。

このようなことから（財）大学基準協会獣医学教育研究委員会は、「獣医学教育に関する基準」をつくり、その中で、教官の充実案を作成した。これを実現するためには、教員の純増、学生の入学定員の増加による教官の増員、獣医学科の統合が考えられるが、はわが国の現状からみて不可能、が現実的で

ある。その方策として、北海道大学、東京大学は自助努力で対応できそうであるが、それ以外の国立8大学では自助努力は難しい。そこで 平等に損をして平等に得をする、 地域的な配置を考慮する、 総合大学あるいは大学院大学を目指すという方針が出された。そのような考えで東北大学、九州大学案がでてきた(唐木先生のスライドでは九州大学、東北大学案と九州大学の方が先に書かれていたが)。このような考えは東北大学、九州大学との打ち合わせなしに独自に決定されたものとのことである。

このような案について、獣医系大学での反応は、さまざまのようで異論も多いようであるが、受け入れ先でも、獣医学部をつくろうとすると他の概算要求が通りにくくなる、周辺の学問領域が圧迫される、卒業生の就職先が奪われる、研究領域が圧迫される、などの批判がでてきていることも紹介された。周辺領域を圧迫する、卒業生の就職先が競合するとの批判に対して新設される獣医学部は、獣医臨床、獣医公衆衛生の部分を大きくし、独自の領域を発展させることで対応するとの考えが示された。

その後九州大学案が比較的順調に進んでいること、北海道大学、東京大学をのぞく8大学では、統合案に対しての対応がまちまちであり、一部の大学では学長、学部長から厳しい反応があって、東4大学(帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学、岐阜大学)の足並みがそろそろ時期は西4大学(山口大学、鳥取大学、宮崎大学、鹿児島大学)より少し遅れるかもしれないことが紹介された。そのような情勢の中で1つだけでも統合案を実現させたいとの考えが生まれ、先行4大学案(統合案が早く学内で承認された4つの獣医学科が九州大学に統合する)などもできつつあることが紹介された。

独立行政法人化案がどのように推移するか、国立99大学1法人化案、1大学1法人化案は、実現しそうになく、大学院大学などは1法人、大多数の大学は複数で1法人となる可能性についても言及された。そのような中で獣医学科の将来が決定されていくことになるだろう、来年夏以降、まったなしの対応が迫られることになるだろうとの考えが示された。

## セミナーでの質疑

出席者から多くの質問があり、唐木先生には丁寧に対応いただきましたが、東4大学の受け入れ先の候補にもなったことのある東北大学のスタッフがどのような疑問をもっているか、紹介します。唐木先生の応答ははぶき、質問あるいは意見のみ紹介します。

- 1) 4大学(北海道大学、東北大学、東京大学、九州大学)案、3大学(北海道大学、東京大学、九州大学)案などいろいろでてきているが、統合すると本

当にスケールメリットが生かして、国際基準を満たせる獣医学部（学科）になれるのかどうか。教官数を増やすことだけ考えて、国際基準を満たす獣医学部をつくらうとするのであれば、3つ、4つつくるのではなく、1つの大学（東京大学）への統合がもっともよいのではないか。自助努力で2大学（北海道大学、東京大学）を温存する必要はないのではないか。北海道大学と帯広畜産大学が合併しても獣医学部としては小さすぎるのではないか。そのように考えるとスケールメリットという基準だけではなく、特色ある獣医学部をつくるという視点が必要なのではないか。

- 2) 再編の考えの3条件、平等に損をして平等に得をする、地域的な配置を考慮する、総合大学あるいは大学院大学を目指す、に加えて、第4の条件として、畜産学などと連携できるという条件も重要なのではないか。
- 3) 獣医学教育のカリキュラムには畜産学科、水産学科、農芸化学科などで講義されている科目も今まで以上に取り入れ、特色あるカリキュラムをもつ獣医学部（学科）をつくる必要があるのではないか。特に畜産学科と協力することによりより食産業対応で諸外国との交流を担いうる獣医師養成のカリキュラムがつけられるのではないか。そのため、畜産学教官組織の大きな大学への異動がいいのではないか。東北大学は畜産学（現・応用動物科学）の教授が9名、10研究室からなり、獣医の1学科に匹敵する。そのようなことから教育面を配慮した場合、東北大学への統合案は十分検討に値するのではないか。
- 4) 将来、学部の壁がとりはらわれれば、多くの分野の教官が獣医学教育に係わることが可能になる。畜産学、水産学、食品学に加えて、医学、歯学、薬学とのカリキュラムも共有する可能性がある。そのようなことから考えて、1～2大学でも統合して大きな総合大学（農学、医学、歯学、薬学部、生命科学部などのある）で獣医学部（学科）をつくと特色ある獣医学が構想されるのではないか。各大学の特徴をのばす点でもメリットが多いのではないか。
- 5) 3大学案は、九州大学への統合を前提としているが、九州大学の構成員はどのように考えているか。九州大学の畜産学科の教官の中には、西4大学から具体的な話が伝わらず、不愉快あるいは反対と思っている教官も多いのではないか。九州大学からの情報は正確に獣医系各大学に伝わっているのか。今までのような論議だけで獣医学サイドの論理をふくらませ、先行3大学案を突出させて大丈夫なのか。
- 6) 日本で取得した獣医師資格が世界で通用するようになるためにはどのようにしたらよいのか。現在の改革案で可能なのか。
- 7) 統合後の大学において、どのような獣医師を養成しようとしているのか理念

が明確ではないのではないのか。獣医科学者を養成しようとするのか、臨床獣医師の養成か、臨床獣医師でもその対象動物は家畜か、ペットか。私立大学の獣医学部（学科）を含めた将来構想が必要なのではないのか。

- 8) 岩手大学獣医学科は本当に東北地区を離れて九州に動く決断をしたのか。そのような決定がなされたのならばたいへん残念である。
- 9) 東北大学への統合が難しいとの判断はどこから出てきたのか。東4大学（帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学、岐阜大学）は西4大学（鳥取大学、山口大学、宮崎大学、鹿児島大学）にくらべ、よい獣医学をつくろうとする熱意が足りないのではないのか。とくに東4大学は、始めから「東北大学への統合案は難しい」「受け入れ先（東北大学）に受け入れの熱意がない」という前提をつくって、別の案をつくろうとしているのではないのか。別の案をつくるため便宜的に東北大学とコンタクトしてきたのではないのか。
- 10) 獣医学の立脚基盤が農学にあるのか、医学にあるのか。状況によって使い分けるのはあまり望ましくないのではないのか。
- 11) 獣医学科再編は農学部再編の先触れとなるにちがいないので慎重に対応してほしい。

## セミナーを終えて

大学の歴史をみると、統合、整理、移管の歴史でもあったように思えます。東北大学における農学を例にとれば、明治40年に東北帝国大学が創立されたときに、理科大学とともに、農科大学が開設されました。その後、農科大学は東北帝国大学から離れ北海道帝国大学農科大学となっております。その後東北帝国大学には農学教育が存在しない状態がつづきましたが、昭和14年に農学研究所（現在の東北大学附属遺伝生態研究センター）が設置され、農学研究が再開されるとともに、昭和22年に農学部が設置されております。農学部が設置された直後に新制大学へ移行しましたが、それにともない、第二高等学校、仙台工業専門学校、宮城師範学校、宮城青年師範学校、宮城県女子専門学校を包括したり、併合し、現在の東北大学の原型がつくられております。

なお、東北大学農学部の創設時には、盛岡高等農林専門学校（現岩手大学農学部）や東北大学農学研究所との合併案もあり、創設委員の坂口謹一郎先生によって「東北大学農学部、農学研究所、盛岡高等農林専門学校を合わせて新しい東北大学農学部をつくる」という成案がまとめられたこともあるようです。

東北大学では、その後、医学部から薬学部（医学部薬学科を改組）、歯学部ができ、教育学部分校が宮城教育大学として独立したりしております。その後、工学系の研究所や各学部新しい学科が新設されたりし、独自の拡充案が実現した時代がつづき、統合、移管などのない時代がつづいてきましたが、大学の歴史をみ

れば、それは例外であったことがよく理解できます。このようなことは全国の大学すべてにあてはまることと考えます。獣医学の再編、統合も歴史の中では一つの動きであり、大学人にとっては、かつて経験したことの繰り返しにすぎないとも考えられます。

東北大学に在籍する者として、同じ東北地区にあり、種々交流のある岩手大学が今後どのようなになるか強い関心をもっております。唐木先生が講演でふれられた「先行4大学案が現実化し、岩手大学獣医学科が九州大学に統合される案が浮上しつつある動き」は驚きをもって受けとめられました。今までの活動をどのように総括してのことだろうか、将来構想が生かされる形での統合になるのだろうか、今後の動向を注視して行きたいと思っております。

各獣医系大学の構想は多様であるべきと思いますが、唐木先生の指摘された3つの課題（臨床教育、公衆衛生教育および基礎教育部分の充実）を図る一つの選択方向としては、畜産学、医学、歯学、水産学、農芸化学と連携して基礎教育部分を充実させること、地域の臨床獣医師、国立試験場などのスタッフを客員教授として迎え、臨床教育、公衆衛生教育を充実させることなどがあると思っております。ある国の例では、試験場、民間の獣医師、研究者が大学教育にかかわり、獣医師養成のプログラムの一翼を占めているようなケースもあるようです。新しい発想にたてば、岩手大学獣医学科は単独でも、十分国際基準に見合った教育が実践できるのではないのでしょうか。獣医学の中だけで議論するのではなく、畜産学、医学、歯学、水産学など広い領域をもつ大学の中で議論をすれば新しい道が開かれるのではないのでしょうか。

スタッフの数だけで議論すれば3大学案より1大学案（すべての国立大学獣医学科を東京大学に集める案。獣医領域の構想にはありません。私がかつてにつくりました）がよりよいものになるのは当然です。旧国鉄は5つの会社に分割されました。3なり、4なりの数字の合理性、論理的継承が求められることでしょう。3なり4なりの特色ある獣医学部（学科）をつくれるかどうかの問題でしょう。地域性に配慮するという論理では現状の国立10大学温存案を越える案は出てこないでしょう。

東北大学農学部（大学院の部局化により大学院農学研究科になりましたが）の中には、獣医学に好意的でない先生もおられます。特に獣医学科が獣医という名前で学生を集められなかった時代を知る先生方に多いようです。また、学問的にも歯学部と重ね合わせて獣医学をとらえる先生もおられます。歯学部には失礼ですが、獣医学も技能者養成のような歯学教育のようになるのではないかと、研究第一主義をとる東北大学の学風と合うのかどうか、心配する声もあります。また、現在、東北大学では生命科学研究科構想、言語科学研究科構想など大学院重点化構想に沿った充実案がまとめられつつあり、また農学研究科では複合生態フ

ィールド専攻構想の実現に向けて動いておりますので、なにをいまさら学部新設かという声もあります。また独立行政法人化前にできるだけ今までの構想を概算要求として具体化したいとする動きがありますので、獣医学部新設という大きな要求は出たくないという考えがあるのも事実です。しかしながら、このような事情は九州大学も同じでしょう。

かって医学部を母体に薬学部、歯学部が誕生したときの状況を参考にするのもいいのではないのでしょうか。医学部の中に新学部創設に熱心なグループがあり、その方達が中心となり熱心に運動を起こしたように伝え聞いております。獣医学部新設にしても、どこか学内に熱心なグループがなければ具体化は難しいのではないのでしょうか。そのように考えれば、九州大学案にしる、東北大学案にしる、先行1大学が、まず九州大学なり、東北大学なりの農学部に移り、その中で、もしどうしても統合しなければ獣医学教育がなりたないとなれば、その異動した獣医学科を核として獣医学部創設案を具体化するのが現実的ではないのでしょうか。すなわちとるべき道は「2段階戦略」ではないのでしょうか。

私は3つの大学で教育経験がありますが、京都大学農学部では畜産学科の教育に係わりました。現在所属する東北大学農学部でも学部教育には応用動物科学系という畜産学の流れをくむ学系の教育に係わっております。東北大学へ異動する前は東京大学医科学研究所の獣医学研究部に在籍し、農学生命科学研究科獣医学専攻にも係わり、獣医学科とも接点をもって教育にあたりました。このような経験を踏まえ、畜産学を立脚点としながらも獣医学の先生方の構想や行動に共感する部分が多々あります。しかしながら今回のような東北大学案の誕生、消滅のように獣医学科の一方的論理（思い込み）だけで行動を終始するのであれば他分野の共感者の多くは離れていくでしょう。目標のみではなくそれを実現する戦略、戦術においてもスマートであってほしいと思います。

また、東北大学のスタッフから質問のありましたように、獣医学は農学ではなく、医学（ヒトの）に立脚点を移そうとしているかのように思える経緯があります。しかしながら、厚生省や医学関係の研究所で「獣医」と名前のつく部門の縮小、整理が行われている現状をどのように考えておられるのでしょうか。私はヒトの医学よりも農学への比重を大きくしなければ、激変しつつある医学の動向の中に獣医学の充実案は埋没するのではないかと考えます。目標を達成するためには、絶えずそのことを念頭において行動することが必要かと思えます。